

「諸外国の教員養成における教員の資質・能力スタンダード」 に関する報告書の概要について

1. 調査研究の目的・概要

（1）調査研究の目的

知識基盤社会が到来する中で，すべての児童生徒の学力を高めていくことが国際的に大きな課題となっており，その担い手である教員の資質・能力の向上を目指した教師教育改革が世界的な潮流となっている。日本においても，教員の専門性を重視しながら生涯にわたる教職生活を通じた職能成長を支えていくために，教員の養成・採用・研修の一体的な改革が推進されている。その中で，教員の育成ビジョンを共有する教員育成指標を開発する動きが，教育公務員特例法等の改正を契機に本格化しており，その活用の在り方や進め方が今後の課題となることが予想される。本調査研究は，特に教員養成に焦点を当て，諸外国において教員の資質・能力スタンダードがどのように活用されているのかの国際比較調査を通して，我が国における教員育成指標の在り方や活用の仕方に示唆を得る基礎的研究を行うことを目的としている。

（2）調査研究の概要

諸外国の教員養成における教員の資質・能力スタンダードの調査に当たっては，各国の教育の専門家による調査研究、及び、研究会やメール等を活用した比較・分析を行った。対象国は，イギリス，ドイツ，フランス，フィンランド，アメリカ，オーストラリア，ニュージーランド，シンガポール，韓国，日本の10か国である。

【研究期間：平成29年度，研究代表者：猿田祐嗣（初等中等教育研究部長）】

2. 研究成果の概要

教員の資質・能力スタンダードの活用について，（1）目標としてのスタンダード，（2）規準（基準）としてのスタンダード，（3）教育システムの基点としてのスタンダードの視点から分析する。

（1）目標としてのスタンダード

- ・目標としてのスタンダードは，教育改革の要として，フィンランドと韓国を除く対象国において，国のレベルで内容スタンダードを開発して，教員養成における全ての教育実践を方向づけるものとして機能していた。
- ・目標としてのスタンダードはまた，めざすべき目標を設定することで，地域間，大学と関連機関・団体の間，教員養成プログラムの間，プログラム内のコースや講座などの空間軸，あるいは，採用，養成，研修などの時間軸において，多様な教育実践をつなぐものとして機能していた。

- ・日本の教員育成指標については、教職キャリア全体を視野に入れた内容スタンダードを整備し、教員の資質・能力の向上に向けた目標を時間軸と空間軸で縦横につないで、教師教育のグランドデザインの構築を目指したものと捉えることができる。

(2) 規準（基準）としてのスタンダード

- ・規準（基準）としてのスタンダードは、目標が達成されたかどうかを判断する評価規準として機能する。イギリス、ドイツ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポールなどの対象国では、パフォーマンス・スタンダードを開発して、教員志望学生の資質・能力をパフォーマンスとして捉え、その結果をプログラム評価にも反映させる工夫が課題の一つとなっていた。
- ・日本における教員育成指標の場合は、基礎的、基本的な資質・能力を確保し、教員の長所や個性の伸長を図るものとして制度化されたことなどから、規準（基準）としてのスタンダードの設定にまでは踏み込まれていないといえる。

(3) 教育システムの基点としてのスタンダード

- ・教育システムの基点としてのスタンダードは、教育水準の向上を目指して、PDCAのサイクルを通して不断の改善を進めていく上での要として機能する。スタンダードに基づく教育システムを展開していくには、長期的な計画が必要であるが、例えば、アメリカでは、当初は、スタンダードは教員養成プログラムを間接的に評価していたものから、教員志望学生の資質・能力そのものを評価しようとする実質的なアウトカムに基づくものへと展開している点が参考になると思われる。
- ・日本においては、目標としての内容スタンダードの機能に焦点が当てられているが、今後、スタンダードに基づく教育システムへと展開されていくのか、注目される。

まとめ

日本における教員育成指標の開発は、本調査研究を通して、生涯にわたる教職全体を見通し、地域のニーズに応じて、養成・採用・研修をつなぐといった国際的にみても優れた着想をもつことが明らかとなった。一方で、今後の活用については、諸外国の動向から、例えば、以下のような方向性が参考になると思われる。

- ・目標を目標として実質的に機能させるとともに、スタンダード化に陥らないように留意することが重要であろう。スローガンやお題目に終わることのないように、教員の資質・能力の育成に向けた教育養成改革を推進するとともに、主体的な試みを奨励し、現場のニーズに合わせた多様なプログラムの開発を可能するような制度設計を工夫していくことが求められるだろう。
- ・目標が達成されているかを評価するために、規準（基準）としてのスタンダードに発展させていくことが考えられる。目標のみならず規準（基準）としてのあり方を検討し、資質・能力を実質的に捉える評価方法を工夫していくことが課題となるだろう。
- ・スタンダードに基づく教育システムへと制度設計を進化させていくことが考えられる。教職キ

キャリア全体を見通して、教員の資質・能力を育んでいくために、採用・養成・研修をつないだ縫い目のない（seamless）スタンダード教育システムの開発へと展開させていくことが示唆される。

教員育成指標の活用にあたっては、教職キャリアの一体的な改革が効果を上げるためにも、諸外国のノウハウにも学びつつ、スタンダードに基づく教育システムの構築が今後期待されるのではないだろうか。